

実践例1 多様な動きを経験しながら運動の楽しさを感じる体を動かす遊び

長井市西根児童センター（山形県）

幼児数：53名 職員数：6名（平成27年1月28日現在）

遊具を組み合わせたサーキット遊び

“大好きなキャラクターになって、跳んだり走ったり。みんなで楽しく遊ぼう！”

特徴1

子供の好きなキャラクターを使った環境設定

テレビのアニメやキャラクター番組が大好きな子供のために、番組のシチュエーションを活かして、サーキットを設計しています。今回は列車をテーマにした番組の設定を使い、いろいろな遊具を線路に見立てたラインで結び、主人公達のモチーフをかたどったヘッドバンドを付けました。また、遊具に装飾を加え、「マット怪獣」など見立ててコースに設置することで、よりイメージを持ちやすくしています。

特徴2

運動と遊びの種類を広げる工夫

遊戯室内だけでなく、廊下もコースの一部として活用し、運動と遊びの種類を増加を図っています。

特徴3

子供が喜んで楽しく取り組める工夫

子供が何度も繰り返し遊ぶことができるよう、遊具の組み合わせを変えたり、意欲に応じて遊び方を工夫したり、アニメやキャラクター番組の音楽をかけて気分を盛り上げたりしています。また、スタート地点を数カ所設けることで待ち時間を作らないようにしています。

特徴4

危険防止のためのルールづくり

分岐点では子供自身が考えて進む方向を決めています。そのため、他の子供と鉢合わせすることもあります。その際に譲り合うと決めておくことで相手を思いやる気持ちが生まれます。サーキットの一環で廊下ですれ違う時にはじゃんけんをします。これは子供が自発的に考えて生まれたルールです。

特徴5

廊下を走らないための工夫

廊下は狭いので走ると他の子供とぶつかる危険性が高い場所です。そのため、廊下のコースは線路を少なくし、カラーリングを置いてケンケンバをしたり、マットを敷いてゴロゴロと転がったりするよう工夫することで、廊下での衝突の危険を減らしています。

特徴6

年齢に応じた遊具の変化

個々の力に応じて、マットやトランポリン等の遊具を入れ替えたり、遊び方を変えています。



子供自身が考えて進む方向を決めます



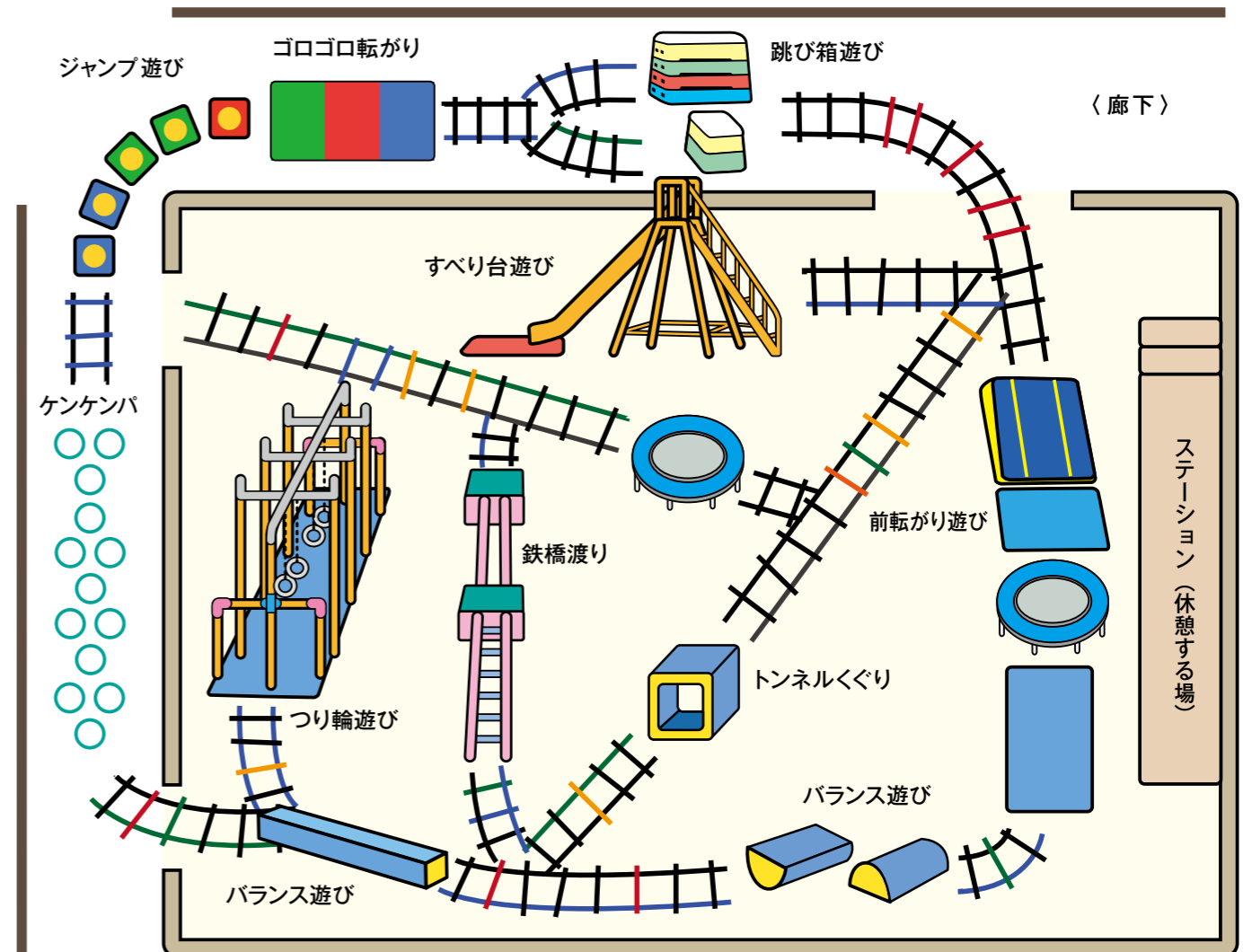
廊下のコース、マットを敷いて転がります



各年齢に応じて、遊び方を変えます



遊戯室と廊下を活用したコース設定

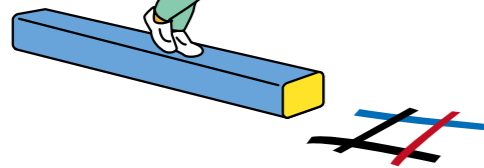
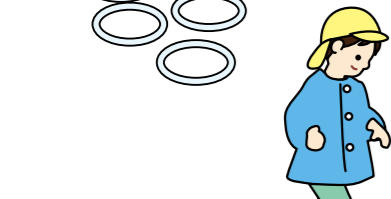
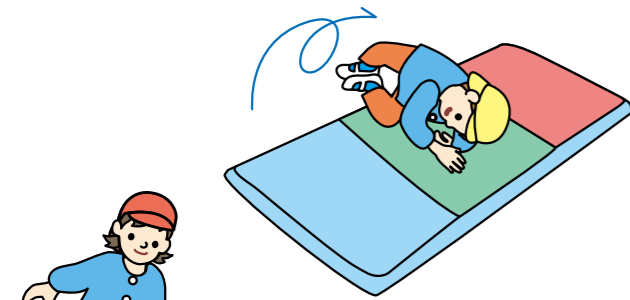


それぞれの遊具：遊びの例

P

ポイント：

- ・つり輪や鉄棒の下、すべり台の着地点には必ずマットを敷き、万が一、落下したり、勢いがつきすぎた時でも大きなけがにつながらないようにしましょう。
- ・危ない場面に遭遇したときなどは、遊びのルールを繰り返し伝え、危険がないよう配慮しながら取り組みましょう。
- ・傾斜ブロックマットや半円ブロックマット、つり輪・鉄棒など、落下や転倒が予想される場所を中心に保育者がサポートします。周囲を見回しながら、他に危ない場所はないかにも気を配りましょう。

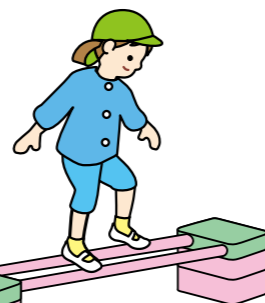


つり輪・鉄棒等

遊びの例：

3歳児：保育者がサポートしながら、輪につかまったり、そこから下に飛び降りたり、鉄棒につかまったりして遊びます。

4・5歳児：自分たちで遊び方のバリエーションを考えながら、自由に遊びます。保育者はできないところを補助したり、危険な遊び方をしている場合は注意したりして、サポートをしていきましょう。



鉄橋渡り

遊びの例：巧技台に渡した2本の平均台を鉄橋に見立てて渡ります。



半円ブロックマット

遊びの例：

3歳児：平らな面を下にして並べ、平均台のように上を歩きます。

4・5歳児：丸い面を下にして置き、落ちないように上に乗ります。



傾斜ブロックマット

遊びの例：

3歳児：保育者がサポートしながら、前転がりをしたり、ゴロゴロと転がります。

4・5歳児：傾斜マットで前転がりをしてから、トランポリンでジャンプします。このときも保育者は必ずサポートにつきます。



トンネル

遊びの例：両手、両足を着き、手と足を使ってトンネルをくぐります。



※ステーション

ここでは各自の水筒やタオルなどを置いておき、子供が自分で水分の補給をしたり、遊び疲れたら休憩する場にします。

繰り返し楽しく遊ぶために工夫していること

日々の観察から興味を見つける

幼児期は面白そうなもの、興味のあるものでなければ、継続した遊びにはつながりません。日々の遊びや活動、会話の中で、子供が今、どのようなものに興味をもっているのかを見つけ、工夫しながら遊びに取り入れていくことを大切にしています。

遊びの中から新しい遊びを作る

サーキットを作って「さあ、遊びなさい」というだけではなく、遊んでいる様子を見ながら、組み合わせを変えたり、子供が自由に遊んでいる様子からイメージに応じた場面を想定したりすることで遊びの楽しさにつなげています。

保育者の声

- ・子供の「挑戦したい」という思いを大切に、どのように体を動かすとよいか、動きのポイントを伝えたり、補助したりして、次のステップにつながるよう言葉をかけていきましょう。
- ・落ちて危ないからといってつり輪や雲梯、鉄棒をあまり制限しないでください。下にマットを敷く、保育者が体を支えるなど、安全面の配慮をしっかりと遊ぶことで、安心して取り組めるようになります。
- ・できないからやらない、あきらめるのではなく、その子供にとってやってみたくなる状況や方法を保育者自身で工夫しましょう。本人が練習をしたと言ったときには保育者が一緒に練習したりして自発性を尊重し、できたときには一緒になって喜んであげてください。友達同士認め合ったり、励まし合ったりする関係づくりも大切です。